

スキナー以後の行動分析学(15)社会構成主義との対話

長谷川 芳典

岡山大学文学部紀要, 2005, 44, 43-62.

・PDF ファイルの頁と、印刷物の頁は一致していません。頁を引用される場合は、印刷物をご参照ください。

1. はじめに

本稿は、翻訳書刊行や質的心理学研究発展の流れのなかで心理学界に影響を及ぼしつつある社会構成主義について、行動分析学の視点からその問題点や誤解や意義について考察することを目的とする。

社会構成主義 (Social Construction または Social Constructionism、「社会構築主義」とも呼ばれる*1)の基となる考え方はさまざまな形で提唱されており、近年では、Kuhn(1962)の『科学革命の構造 The Structure of Scientific Revolution』を通じて「社会的に構成された主観性」という考え方が広まり、また Berger and Luckman(1966)による『日常世界の構成 The Social Construction of Reality』における議論を受けて、心理学の世界にもその視点を紹介する動きが広がってきた。

過去 20 年あまりの間に、社会構成主義の立場から心理学を論じた論文としては、まず Gergen(1985)の「The social constructionist movement in modern psychology.」を挙げることができる。また Moscovici(1988)は、心理プロセス面に焦点を当て、Gergen とはやや異なる議論を展開した。

さらにここ数年のあいだに、社会構成主義の主張は日本国内の心理学関係者にも広く知られるようになってきた。その理由として以下の 2 点を挙げることができる。

第 1 の理由は、心理学の研究において、質的心理学が確固たる地位を築いたことにある。2004 年 9 月に日本質的心理学会の第 1 回大会が開催され、公式サイト*2 によれば、530 名以上の参加者があったという。また 2005 年 9 月までの 1 年間で会員数は 500 名を超え

*1 本稿では、Social Construction の訳語として「社会構成主義」を一貫して用いることにする。理由は、心理学と関係づけながら刊行された最近の関連書に「構成主義」という呼称が多いためである。なお、中河編(2001,p.6)は、

本稿では、基本的には“constructionism”もしくは“constructivism”を「構築主義」と訳しているが、それは完全に定まった訳語ではない。その両方を「構成主義」と訳す論者もあるし(この訳し方はどちらかといえば現象学的な視点と親和性が高いようだ)また前者を「構築主義」、後者を「構成主義」と訳し分ける論者もある。ただ、英語ネイティブの研究者の中にも、二つの原語を使い分ける人もいれば、そうでない人もいるから、訳し分けることがつねに妥当だともいえない...【以下略】

と述べ、構築と構成については用語の統一を図らない方針を示している。

*2 <http://quality.kinjo-u.ac.jp/> なお『質的心理学研究』誌は 2002 年に第 1 号が刊行されている。

ているという。学会誌発行や年次大会開催を通じて質的心理学研究は飛躍的に活発に行われるようになった。

ちなみに、「質的心理学」とは単に「量的に統計処理ができないカテゴリカルなデータを扱う心理学」という意味ではない。やまだ(2004, p.11-12)によれば、質的研究は「ナラティブ・ターン(物語的転換)」を基盤とする人間観や認識論と結びついており、共通する基本的特徴としては

客観主義の基盤になってきた「素朴实在論」への懐疑。

観察者と観察対象の相互作用や社会的相互行為の重視。

社会・文化・歴史的な文脈を抜きに抽象的に仮定されてきた「普遍性」と「グランド・セオリー」への懐疑・

人びとが生きる世界の多元性と多様性、変化プロセスの重視。

意味やナラティブの重視。

という5点を挙げるができる。社会構成主義の視点はそのいずれにも関与しているが、特に上記に関して、「現実(リアリティ)」とは何かを考える上で重要な理論的な立場を与えている。但し、質的心理学の理論的立場イコール社会構成主義ということではない。観察者と観察される現実との複雑な相互作用を考える文脈主義者や、すべてを相対化するポスト・モダニストの立場などさまざまである(やまだ, 2004, p.12)という点に留意しておく必要がある

第2の理由として、ここ数年のあいだに心理学の立場から社会構成主義の視点の必要を説いた書籍が相次いで翻訳され、また日本語の心理学論入門書の中でも取り上げられるようになった点を挙げるができる。これにより関連領域の専門家ばかりでなく、心理学の初学者や実践家でも容易にその考え方の基本を知ることができるようになった*1。

このうち代表的な翻訳書としては

Gergen, K. J. (1994): *Realities and relationships; Soundings in social construction*. Cambridge: Harvard University Press. [永田素彦・深尾誠(訳). (2004). 社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる, ナカニシヤ出版.]

Gergen, K. J. (1999): *An invitation to Social Construction*. London: Sage. [ガーゲン(著) 東村知子(訳) (2004).あなたへの社会構成主義, ナカニシヤ出版.]

*1 Gergen(1994)の翻訳者の一人、永田素彦氏の訳者あとがきによれば、Gergenは日本には、1972～73年にフルブライト交換研究員として、2000年に日本学術振興会研究員として、いずれも京都大学に滞在している。2000年の来日時には、日本心理学会第64回大会において基調講演(「Psychological Science in Postmodern Context)を行ったほか、複数の大学に招かれて社会構成主義の講演を行った。

の2冊を挙げる*1。

また、心理学論の入門書としては、下山晴彦氏編集の「心理学の新しいかたち」シリーズの第一巻目『心理学論の新しいかたち』を挙げる*1。その第一章において下山(2005)は

自然科学の原理にもとづき、データを数量化し、統計的手法を用いて仮説の検証を行なう科学的心理学の在り方に対して、それでは人間が生きている具体的な現実や状況をとらえられない、という批判も出てきている。そこでは、人間の生きている現実、実体して存在するのではなく、人びとの交流を通して社会的に構成されるとする社会構成主義 (social constructionism) など、科学とは異なる理論にもとづく方法が主張されている (Gergen, 1994; 1999)。

と述べ、社会構成主義の影響の大きさを強調した。

また同書第四章において杉万(2005)は

社会構成主義と心理学～「内なる心」の観念を超えて

というタイトルで社会構成主義の基本的特徴を紹介し、伝統的な心理学研究法の問題点を指摘している。

2. 社会構成主義の特徴

社会構成主義、もしくは社会構築主義という用語で指し示されるスタンスや研究法は多様であり、時には社会学そのものと同義であると主張されることさえある(中河, 2001, p.4 参照)。紙数の制限があることから、本稿では主として Gergen (1994, 1999) や杉万 (2005) の主張をベースとし、物理的世界の捉え方、行動分析学への誤解、科学的認識とは何か、心理学研究のあり方に関する部分など限定して論考を進めることにしたい。残された部分については、本稿の続編で順次取り上げていく予定である。

さて、Gergen(1994、翻訳書 p.62-68)によれば、社会構成主義の5つの中心的前提は以下の5点に要約される。

世界やわれわれ自身を説明する言葉は、その説明の対象によって規定されない。

世界やわれわれ自身を理解するための言葉や形式は、社会的産物である-----すなわち、歴史的・文化的に埋め込まれた、人々の交流の産物である。

世界や自己についての説明がどの位の支持されるかは、その説明の客観的妥当性ではなく、社会的過程の変遷に依存して決まる。

言語の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方の中にある。

*1 最近刊行された書籍としては、これ以外に

Gergen, K. J. (1994a): *Toward transformation in social knowledge*, 2nd ed. London: Serge [杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀(監訳)(1998). もう一つの社会心理学---社会行動学の転換に向けて. ナカニシヤ出版.]

があるが、本稿執筆時点では原書が入手できず、また翻訳書は品切れ・再版未定となっていたため、本稿で引用することはできなかった。

既存の言説形式を吟味することは、社会生活のパターンを吟味することにほかならない。こうした吟味は、他の文化集団に発言力を与える。

また、Gergen(1999、翻訳書 p.72-87*1)の入門書では、上記の前提は“社会構成主義の「4つのテーゼ」”としてまとめられている。

私たちが世界や自己を理解するために用いる言葉は、「事実」によって規定されない。

記述や説明、そしてあらゆる表現の形式は、人々の関係から意味を与えられる。

私たちは、何かを記述したり説明したり、あるいは別の方法で表現したりする時、同時に、自分たちの未来をも創造している。

自分たちの理解のあり方について反省することが、明るい未来にとって不可欠である。

最後に『心理学論のあたらしいかたち』(下山編, 2005)の中で、杉万(2005)は社会構成主義を次のように特徴づけている(長谷川による要約)。

「行為(認識を含む)とその対象は、ことごとく集合流の一コマであり、集合流の一コマとしてしか存立しえない」

社会構成主義はメタ理論である。個別的な研究を発表する中で、「社会構成主義に基づき云々」などと言及する類のものではない。

社会構成主義は、論理実証主義に対抗するメタ理論である。但し、一次モード(現象を把握し、実践の対象とする段階)の研究スタンスは、論理実証主義と何ら変わらない。それに続く二次モード(先行する一次モードの現象把握と実践を相対化する段階)における現象把握の改訂のしかたは論理実証主義と決定的に異なる。

社会構成主義は「現実はすべて社会的に構成される」と主張しているが、物理的制約を否定しているわけではない。しかし、原理的には、その物理的制約について何か一言でも発するとすれば、それは、すでにして社会的構成の産物、集合流の一コマである。

「肉体に内蔵された心」は内なる世界、すなわち、内界、一方、外なる世界、すなわち、外界は、内界にどのように捉えられるか(認識されるか)とは無関係に、それ本来の姿で存在する、と考えられているが、社会構成主義ではこうした、「内界-外界」パラダイムは棄却される。強いてそれに代わるパラダイムを言えば、「集合流-制約条件」パラダイムである。

3.行動分析学と社会構成主義との対話

Gergen(1999,翻訳書 p.141)が

【社会構成主義の考え方は】原理的に対抗するすべての立場 例え、実証主義のような に対して、われこそが真実だと主張することではないのです。社会構

*1 Gergen の著書からは原書本文を確認のうえ引用しているが、読者の便宜に配慮し、本稿ではすべて翻訳書の該当頁を記す。

成主義は、どんな伝統や生き方にも、一定の価値と理解可能性があると考えます。と述べていることから言えるように、社会構成主義は「どちらが正しいか」という二分法の議論を否定している。それゆえ、行動分析学を含む伝統的心理学の諸理論や研究法が、社会構成主義の立場から真っ向から否定され排除されるということは原理的にありえない。

しかし、社会構成主義は、伝統的心理学が疑い得なかった種々の前提に根本的な疑問を投げかけている。それによって、「実験的に実証された」といった主張は権威を失い、多くの研究目的は期待されるほどの成果を上げ得ないことが見透かされてしまう。心理学諸学会の年次大会で発表される研究の8割方は、そのまま続けても成果に限界があり、研究費の無駄遣いと見なされてしまう恐れさえある。

社会構成主義が伝統的心理学に向けて発している批判の矛先は主として、論理実証主義や認知心理学に向かっているが*1 行動主義や行動分析学への批判も相当なものである。ただし、そこには誤解もある。特に、行動主義各派の中で徹底的行動主義(=行動分析学)の特徴づけについてはかなり曖昧であると言わざるを得ない。また、そうした誤解や曖昧さを正してみると、実は、社会構成主義の主張は行動分析学のそれとかなり似通った部分があることに気づく。

3.1. 新行動主義諸派の衰退と行動分析学の発展

Gergen (1994)は、

この数十年の間に、行動主義の理論は、実質的に衰退してしまった。それに代わって主流になったのが、認知主義である。(p.17-18)

急進的行動主義は、徐々に、新行動主義の理論(S-O-R 理論)に道を譲っていった。(p.22)

というように、行動主義は認知主義に主役を譲り、また急進的行動主義(radical behaviorism、本稿では「徹底的行動主義」と呼ぶ)は新行動主義に道を譲ったというように位置づけている。しかしこれらは、現代の心理学界の現状を正確に把握しているとは言い難い。

たしかに、心理学の代表的な教科書を1970年版と2000年版で比較してみれば、行動主義心理学に関する研究の記述が縮小していることは事実である。しかし、行動分析学の学

*1 Gergen(1994)は「社会心理学-----認知革命の過ち」というタイトルの1つの章(第5章)を割いて、認知心理学の研究手法、対象全般にわたり批判を展開している。しかし、その批判は認知主義の排除を企図したものではない。章の終わりは以下のように結ばれている(翻訳書 p.187)。

この意味で、先に述べた認知主義批判は、認知主義の排除を意味するものではない。そうではなくて、主たる批判の意図は、きわめて限定的で自己反省的契機をもたない科学の、ともすれば傲慢な姿勢を牽制することにあった。述べてきたように、認知主義は、個人の行為について新たな興味深い観点を多々提供してきた。しかし、認知主義の観点が言説の世界を支配してしまうと、かえって、心理学は、文化を豊かにする能力を失ってしまうだろう。

会は、国際的にも日本国内においても着実に活動を続けており*1、会員数も増加カーブをたどっている。特に、発達障害児や認知症高齢者の生活自立支援、日常生活や企業におけるパフォーマンスマネジメント、教育現場への応用など種々の分野で有用な研究成果をあげているところである。認知主義の隆盛は否定できないとしても、取って代わられて消滅したわけではない。

また、Gergen (1994、翻訳書 p.23)が「クラーク・ハルの『行動の原理』からの引用に優るものはないだろう」と位置づけているハルの研究(Hull, 1943)はもはや過去の遺物と化している。さらに急進的行動主義(徹底的行動主義)が新行動主義の理論(S-O-R 理論)に道を譲ったという証拠はどこにもない。後述するように、ハルらの新行動主義と、スキナーらの徹底的行動主義は、学問の構築方法に根本的な違いがある。ハルらの仮説構成体概念や仮説演繹の方法を批判したところで、行動分析学への批判には全くなならない。というか、行動分析学自身こそ、ハルのやり方を徹底的に批判してきたのである(佐藤, 1985)。

Gergen (1994)は行動主義に言及するにあたって

もちろん、過去への逆戻りは許されない。(翻訳書 p.3)

合理主義の影響が消えれば、伝統的な心理学には見るべきものは残らないだろう----

行動主義(経験主義)の伝統に回帰することもできないだろうし...(翻訳書 p.6)

というように、行動主義を過去の遺物として扱い、古いものだから戻るわけにはいかないという論調で議論を打ち切っているふしがある。ちなみにこれらは行動主義一般に対する批判的論調であったが、スキナーの徹底的行動主義に関しても

例えば、スキナー流の行動主義に対する疑問は、それが客観的に妥当かどうかではない。そうではなくて、もし行動主義の理論言語を採用したならば、われわれの人生がいかなる形で豊かに、あるいは、貧しくなるか、ということである。われわれは、「意図」「自由」「尊厳」などの言葉が中心的重要性をもつような様々な実践を放棄することを望んでいるだろうか？ もしも望んでいないのならば、われわれは別の理論を求めなければならない。

という形で議論を終わらせている(翻訳書 p.173)。しかし、「望んでいるだろうか？ もしも望んでいないのならば...」というのは、好みの選択であってまっとうな議論ではない。また徹底的行動主義では、「意図」や「自由」を頭ごなしに放棄したのではなく、それらがどういう行動随伴性のもとで感じられるのかについてそれなりの分析をしつつ、説明概念としては必要無いという理由で使っていないだけのことである。このあたりも、建設的な方向で議論を進めていく必要があるように思う。

*1 国際学会としては Association of Behavior Analysis

<http://www.abainternational.org/>

が知られている。また、日本国内には、日本行動分析学会

<http://www.j-aba.jp/>

があり、いずれも毎年活発に大会やシンポジウム等を開催し、学術誌を刊行している。

3.2. 物理的世界と随伴性空間

社会構成主義と行動分析学の基本的立場を比較する上で最も重要と考えられるのは、「物理的世界」の扱いであろう。両者の捉え方は相容れないように見えるが、実はそれほど変わっていない。本節ではこのことを指摘していくことにしたい。

社会構成主義は「現実はずべて社会的に構成される」という捉え方をしている、とよく言われる。これは極論すれば、物理的世界は存在しないか、存在していても語ることはできないという主張に繋がる。もっともそこにはいくつかの誤解があるようだ。社会構成主義にもいろいろな立場があるので一概には言えないが、少なくとも、Gergen (1994, 1999) の立場は、物理的世界を否定するものではない。

まず Gergen(1994)は、第3章第3節“社会構成主義は、現実世界への関心をすべて放棄するのか? 「しかし、世界は実在する!」 ”において次のような見解を表明している(翻訳書 p.94-99、長谷川による要約)。

実証主義の立場から社会構成主義に向けられる批判の典型は、社会構成主義は、厳然と存在する現実を前に、ばかげた主張をしているというものである。具体的には、次のような様々な批判がある。「火のついたマッチをガソリンの容器に入れても、その結果はわからないと言うつもりか?」...「世界が実在しないと言うつもりか? 世界は、社会的でちあげの産物とでも言いたいのか?」。しかし、社会構成主義は、爆発死を否定しないし、より一般的には「世界の实在」も否定しない。しかし同時に、社会構成主義は、それらの实在を肯定もしない。先に述べたように、社会構成主義は、「それは実在するのか」という問いに対しては沈黙する。それがいかなるものであっても、ただそれだけのことだ。

「内界」に対する「外界」の基本的記述など存在しないし、経験や物質の基本的記述も存在しない。しかしながら、「そこに何かがあるのか」を明示化しようとした途端、われわれは言説の世界に入り込むことになる。まさにその瞬間から、社会的構成のプロセスが始動し、明示化の試みは、社会的構成のプロセスおよび歴史・文化の中に、分かち難く織り込まれることになる。

言葉と「实在」を対応させる方法など存在しない。両者の対応を決めるのは、特定の共同体の慣習のみである。すなわち、もし、ある言葉(の配列)が、「ありのままの現実を捉えている」かのように見えるとすれば、それは特定の慣習のなせるわざなのである。

また Gergen(1999)は、「だって、確かに世界はそこにあるじゃないか」という批判に次のように答えている(翻訳書 p.328-331 頁、長谷川による要約)。

社会構成主義は、「何が存在するのか」「何が事実か」を決めてしまおうとしているのではないのです。何かは、単にそこにあります。ところが、何かがあるのか、何が客観的な事実なのかを明確に述べようとした始めた瞬間、私たちはある言説の世界、したがってある伝統、生き方、価値観へと入りこんでいきます。

「目の前に」現実の世界があるかないかを問うことでさえ、心(頭)の内側にある主観的な世界と外側のどこかにある客観的な世界を分けようとする、二元論という西洋の伝統的な形而上学を前提としているのです。

「事実」についてのある説明を固く信じている時、私たちは、他の可能性に対して自らを閉ざしてしまっています。この意味で、私たちにとって最も明白なものこそが、実は最も限定されたものであるといえます。

あらゆる人間の行為を「物質的なもの」に還元すれば、それらは平板で無味乾燥なものになってしまいます。神秘的で深い意味をもつ言説をすべて捨て去ることを、私たちは心から望んでいるのでしょうか。

言い換えると、私たちは、「現実」何が事実か、何が本当に起こったことが----に言及する時、しばしば対話のチャンスを閉ざしているのです。「現実」についての言明は、そこで会話をストップさせ、他の人々が発言する機会やその内容を制限することになります。

私たちは「事実」や「現実」に訴えて議論を終わらせようとすることに對して、常に慎重でなければならないのです

さて、それでは一方の行動分析学は「物理世界」をどう捉えているだろうか。Skinner (1953)が主張しているように、行動分析学は、行動は科学的研究の対象になりうるものであると考えており、かつ、行動の原因を、内的要因ではなく、個体と環境との関わりの中に求めるべきものであることを主張している。また、スキナーの最大の貢献であるとされている行動随伴性概念は、

- ・ある条件の下で
- ・ある行動をすると
- ・ある環境の変化が起こる
- ・という、行動と環境との関係

として定義されている(杉山ほか 1998; 長谷川, 2004 参照)。ここでは最低限、行動が客観的に観察可能であること、また、環境世界があり、随伴性という相互作用のなかで行動が形成され、維持されていくものと仮定されている。

しかし、行動分析学が対象とする環境世界は、「個体と完全に独立した物理世界」と決して同一ではない。

まず、行動分析学から離れても一般論として、個体をとりまく環境は物理世界のほんの一部にすぎない、と指摘することができる。例えば、特定の手段により観測可能な宇宙線、放射線、電磁波、超音波、磁場などは、我々を取り巻き、我々の体の中を貫いているが、行動と環境の関わりを考える時には通常これらは考慮されていない。また、ミツバチが見ることのできる 300nm から 400nm の波長の光は、人間の日常生活上、視覚刺激として意味をなしていない。

次に、パヴロフの実験で知られるレスポンド条件づけの事例を考えてみよう。例えば、パヴロフの犬に、まず餌を与える。与えられた犬はヨダレを流す。次に、餌と同時にメトロノームの音を聞かせる。これを繰り返すと、餌を伴わないメトロノームの音を聞いた時にもヨダレを流すようになるというのがレスポンド条件づけであった。また、そ

の際、餌は「無条件刺激」、メトロノームの音は「条件刺激」と呼ばれる。

ここで留意すべき点は、餌やメトロノームの音を物理的・化学的にどのように細かく分析しても、「無条件刺激」「条件刺激」という性質は決して見いだされないということである。いずれも、犬と物理世界との関わりの中で定義される関係概念である。また、犬にとって、メトロノームの音は当初何の意味も持たない刺激であった。条件づけのプロセスを経て、新たに環境世界に付け加わった刺激であると言うこともできる。

オペラント条件づけにおける強化刺激や弁別刺激もすべて、個体と外界との関わりの中で定義されていく。習得性好子、習得性嫌子といった強化刺激、あるいは、交通信号や道路標識のような弁別刺激は、すべて、個体と環境との関わりの中で形成されるものである。上記同様、これらの刺激を物理的・化学的にいくら細かく分析したところで、強化刺激や弁別刺激といった性質は決して出てこない。

ここで重要なことは、操作対象として概念と、機能や効果に言及する時の概念との区別である。例えば、「条件刺激としてメトロノームの音を呈示する」と言う場合、これは、物理世界に属する音刺激を一定の強さ・時間で発生させるという意味と、ヨダレというレスポナント反応を誘発させる目的でその音を行動制御に用いるという二重の意味があることに留意しなければならない。前者は物理世界における操作であるが、後者は、関係性の中で、一定の条件のもとで成功する操作ということになる。

長谷川（2004）は、基本随伴性の留意点として、

好子や嫌子は、モノそのものではない

「与える」は文脈に依存する

「好子を与える量」は物理量に比例しない

という3点を挙げた。随伴性に基づいて行動を分析するということは、決して、物理世界からの刺激入力や外界の性質で行動を説明することを意味していない。

3.3. 関係性は言葉だけで語られるものではない

社会構成主義は、物理的世界の存在やその制約を否定しているわけではないが、人間がそのことについて少しでも何かを語り始めた時にはもはや、「事実」や「現実」そのものではなく、と指摘している。いっけん疑いの無い、明白であるように見える現象に対しても、それぞれの関わり方やニーズによって多面的な見方を構築することができる。「事実なんだからそれで終わり」というような思考停止をしないことを説いている点は、批判的思考（クリティカルシンキング）*1 の必要性とも通じるところがあり、まことに意義深い。

もっとも、いくらおしゃべり好きな人間にとっても、「事実」は語られるばかりではな

*1 批判的思考（クリティカルシンキング）については

ゼックミスタ・ジョンソン(著)、宮元・道田・谷口・菊池(訳) (1996). *クリティカルシンキング入門編*. 北大路書房.

のほか、長谷川の Web サイトを参照。

http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/journal/psy-rec/_40208/index.html

い。「語る」こと以前に、我々は、物理的世界に能動的に関わり、そこで一定の行動を形成し、そのことに基づいて「語っている」のである。また、語ることはしないが、人間以外の動物たちも、それぞれのやりかたで物理世界と関わり、適応し、子孫を残しているのである。物理的世界のとらえ方についての社会構成主義の主張は基本的には正しいと思うが、「語る」ことを偏重する以前にまず、そういう「語り」がいかなるプロセスで構築されていくのかを分析していく必要がある。これぞまさに、行動分析学のアプローチではないだろうか。

このことに関して、Guerin(1992)は Ryle(1949)の議論にならい、行動分析学の視点から次のような指摘を行っている*1。それによれば、Gergen らが言うところの「世界の捉え方」は、じつは「knowing that」に限定されている。これはまさに、行動分析学が言語行動として研究している対象である。しかし、世界の捉え方にはもう1つ「knowing how」がある。そして、Gergen らはこちらのことは言及していない。「knowing how」と「knowing that」という2つの知識は明確に区別されなければならない。

Ryle (1949) が呼ぶところの「knowing how」は、動物の弁別行動として知られる。すなわち、人間ばかりでなくハトでも、緑色のライトが点灯した時には左側のキーを、赤色のライトの時は右側のキーを押すという弁別を容易に学習することができる。そのさい、「語る」ことは全く必要ない。この種の弁別行動は、環境との関わりの中で直接的に形成されたものである。もし別のハトが同じように弁別できたとしても、それは「社会的に構成された知識」では断じてない。同じ行動随伴性に晒された2羽が同じように振る舞っただけのことである。同様に、我々はドアノブを回し、ドアを開ける。ドアノブを回す動作はよく似ているが、これも社会的に構成された知識によるものではない。「ドアノブを回せばドアが開く」という自然に組み込まれた随伴性によって同じ行動が形成されただけのことである。

いっぽう、Ryle (1949) が呼ぶところの「knowing that」は、まさに社会構成主義が言及しているところの知識に他ならない。この意味での「知る」とは適切な言語行動を生起させることである。例えば「ペルーの首都は？」という問いに対しては、しかるべき文脈においては「リマです」と応えることが適切な言語行動ということになる。

以上の議論にもとづいて Guerin(1992)は、Gergen らが言うところの「社会的に構成された現実」とは、言語行動に関わる随伴性の中で形成された世界に限定されるものであると主張している。

ところで、Gergen(1994、翻訳書 p95.)は物理的世界に関する社会構成主義への批判「火のついたマッチをガソリンの容器に入れても、その結果はわからないと言うつもりか？」に対して、

社会構成主義者ならば、次の二つのことを問う。第一に、同じ状況を記述する、他のやり方があるだろうか？ 言うまでもなく、イエスである。芸術家ならば色の色調と

*1 本稿では引用するガーゲンの主張は主として 1994 年および 1999 年に刊行した著作を (Gergen,1994, 1999) に基づいているが、Guerin(1992)の論文はそれらが刊行される以前に発表されたものである。そこでは Gergen(1985)および Moscovici(1988)の一連の論文に対する批判が展開されている。

彩度の変化を説明するだろうし、詩人ならば高揚する精神を詳述するだろうし、化学者ならば熱をもつた分子を分析するだろうし、シャーマンならば神秘の力を説明するだろう。こうした説明の多様性は、われわれを、第二の問いに導く。すなわち、ある説明は、他の説明よりも、客観的に正確だと言えるのか？ もしそうだとすれば、それはどんな根拠によるのか？

と応えている。

しかし、物理的世界の操作(=ここでは「火のついたマッチをガソリンの容器に入れる」)と、その現象が生じた際の言語的報告は明確に区別できる。何の環境変化も無いところで何の脈絡もなく報告されるものではない。とにかく「ガソリンが爆発する」という単一の事象がまずあって、そこに由来した多種多様な言語的記述が生まれていると考えることのほうが生産的である。「ガソリンが爆発する」が事実であるかどうかということに疑問をもつなら、単に、議論の前提としておいてもよからう。この前提を否定したところで建設的な議論に至るとは思われない。

なお、Gergen(1994)は序文の中で、デカルトの「我思う、ゆえに我あり Cogito ergo sum」は正しくは「**言説あり、ゆえに我あり** communicamus ergo sum」と言い換えなければならないと説いているが、以上見てきたように、言説で知られる世界はごく限定されたものであり、また、環境世界は人々の関係性のプロセスの中でのみ構成されるものではない。そういう意味では、デカルトの格言の最初の部分は「我思う」でも「言説あり」でもない。正しくは「**関わりあり、ゆえに我あり**」とすべきである。ここで「関わる」のは他者ばかりではない。空気や水、植物や動物、人口建造物などすべてが含まれており、まずは、それらと非言語的に関わる。そうしているうちに後から言説が生まれてくると考えるべきだ。操作可能な環境世界と行動随伴性に基づく分析こそが社会的に構成されるプロセスを明らかにできるであろう。

3.4. 「内なる心」の観念を超えて

杉万(2005)は、社会構成主義の立場から

通常、われわれは、人間といえば、皮膚で画された肉体、しかも、その肉体の内部のどこかに、何かを感じたり考えたりする心(精神)を有する肉体をイメージする。一言で言えば、人間とは、「心を内蔵した肉体」であるという人間像を、われわれはもっている。

しかし、「心を内蔵した肉体」という人間像は、私たちの素朴な日常経験から自然に形成されたものではない。この人間像は、特定の歴史的経緯、および、生育史的経緯を経て構成された、まさに社会的構成の産物なのだ。

と指摘し、さらに「内界 - 外界」パラダイムを棄却している。

いっぽうスキナーは以下のような語録を残している*1。

．．．．the conception of mind is a human invention, not a discovery (Skinner, 1974).

【佐藤方哉氏の訳】．．．心という概念は、人間が発見したものではなく発明したものである。

As long as we cling to the view that a person is an initiating doer, actor, or causer of behavior, we shall probably continue to neglect conditions that must be changed if we are to solve our problem (Skinner, 1968).

【佐藤方哉氏の訳】人は行動を自分から起こすのだという考えにしがみついているかぎり、問題を解決するためには変えなければならない諸条件を無視し続けるにちがいない。

「心を内蔵した肉体」を前提とせず、またその概念はこしらえたものであるという主張は、社会構成主義と行動分析学の間できわめて似通った内容となっている。

3.5. オペラント概念についての理解不足

Gergen(1994、翻訳書 p.26)は、劇的な影響力をもったものとして、生得主義に基づく批判を挙げている。

中でもとりわけ劇的な影響力をもったのは、生得主義に基づく批判であるそれは、人間行動が、刺激入力からだけでは決して説明できないと主張する限りにおいては、一九三〇年代のゲシュタルト心理学による批判と共通していた。例えば、チョムスキー(Chomsky, 1968)が見事に示したように、言語使用の能力は、原理的に、環境からの強化によっては導かれえない。また、ピアジェ(Piaget, 1952)らによれば、抽象的思考能力は、学習によって獲得されるものではなく、子供の自然な発達によるものである。より一般的に言えば、有機体は、固有の生得傾向情報を探索し処理する傾向、仮説を立てる傾向、目標に向かう傾向などを備えていることが主張された。こうした議論の出現により、一方向的な因果関係 刺激 反応という因果関係の連鎖という考え方も崩壊した。そして、多くの点で、有機体はそれ自身の自律的な行動原因をもっていと主張された。

しかし、以上の主張は行動分析学の中心概念の1つである「オペラント」にふれていない。特定の刺激(無条件刺激または条件刺激)によって誘発される「レスポナント」(無条件反応または条件反応)と異なり、「オペラント」は生活体によって自発される行動として定義され、その行動に結果が随伴することで変容する。オペラント条件づけの枠組みは「一方向的な因果関係 刺激 反応という因果関係の連鎖」などというS-R理論とは無縁である(長谷川, 1993 参照)。

なお上記引用の中ではチョムスキーの「言語使用の能力は、原理的に、環境からの強化

*1 日本行動分析学会第23回年次大会(2005.7.29.~7.31.、常磐大学)大会実行委員会企画シンポジウム:

司法において心理学に期待されるもの、「罰なき社会」の探求(What is expected of science of behavior in judicial field, search for a non-punitive society.)

における佐藤方哉氏の話題提供に基づく。

によっては導かれえない」、あるいはピアジェの「抽象的思考能力は、学習によって獲得されるものではなく、子供の自然な発達によるものである」という指摘が論拠に挙げられているが、これらは現時点で、必ずしも実証済みであるとは言い難い。またこれらが部分的に実証されたとしても「言語使用能力や抽象的思考能力はいかなる意味でも学習を必要としない」などとは断定できないはずだ。もしそんなことになったら、学校で言語使用や抽象的思考を教育すること自体無意味になってしまう。いっぽうスキナーの徹底的行動主義では、人間行動のすべてが学習だけで決まるなどとは一言も主張されていない。佐藤が紹介したスキナー語録の一節*1はこのことを端的に表している。

I am a place in which genetic and personal history come together to produce what I am doing.

いずれにせよ、行動分析学は生得的要因を何ら否定していない。それぞれの種が生得的に持ち合わせているオペラントのリパトリ、生得性好子、生得性嫌子、無条件刺激、無条件反応というように生得的要因を取り込んだ上で、学習により変容する範囲はどのあたりまで及ぶのかを検討することを旨としているのであって、生得か学習かという二者択一的な議論はなじまない。

3.6. 強化についての誤解

行動分析学で最も重要な概念の1つに「強化」があるが、Geregen(1994、翻訳書 p.22-23)では行動分析学とは全く異なる形で「強化」が語られ批判されている(趣旨を変えない範囲で一部省略)。

スキナー(Skinner)、ソーンダイク(Thorndike)、バンデューラ(Bandura)のような学習理論家によれば、強化とは、ある反応パターンを選択・維持し、その他の反応パターンを「消去する」ことである。その際、選択・維持される反応パターンは「適応的」と言われ、消去される反応パターンは「非適応的」と言われる。複数の行為の中から、適切なものを指定するという意味において、仮説検証は、強化と同じ機能を果たしている。このように見ると、仮説演繹法の第四ステップ、すなわち理論の拡張と修正の段階が、スキナー派の言う「行動形成」過程の後の段階、あるいは、より認知主義的な学習理論の言う「期待確認」過程の一段階に対応していることがわかる。いずれの場合においても、個人の心的機能が、徐々に環境に適応していくものとみなされている。このように、仮説演繹システム全体が、行動主義の様々な学習理論の中に現れている。

Geregen(1994、翻訳書 p.163-164)の以下の記述は、行動分析学における強化の概念とは根本的に異なるものである(要約は長谷川による)。

強化による説明は、ハル(Hull, 1920)の概念獲得についての古典的著作以来、心理学ではよく知られている。強化理論は、典型的には(必ずそうというわけではないが)、

*1 日本行動分析学会第23回年次大会(2005.7.29.~7.31.、常磐大学)大会実行委員会企画シンポジウム:

司法において心理学に期待されるもの、「罰なき社会」の探求(What is expected of science of behavior in judicial field, search for a non-punitive society.)

における佐藤方哉氏の話題提供に基づく。

概念学習のプロセスを仮説検証のメタファーで捉える。

強化による説明には、大きな難点がある。その難点とは、認知主義が前提とするように、人々が反応するのは認知された世界であって世界そのものではないとすれば、強化(仮説検証)のプロセスが説明不能になるという問題である。

強化(行動の結果、失敗、その他環境からのフィードバック)を通じて、概念の修正が可能であるためには、個人は、強化に先立って、あらかじめ概念のレパートリーをもっていないとてはならない、という問題である。

強化やフィードバック(エラー・シグナル)が意味をもつためには、行為や事物の世界が概念化されている必要がある。例えば、環境からのフィードバックによって、乳児の概念が確証ないし矯正されるためには、その乳児は、何らかの概念構造をもっていないとてはならないはずだ-----

このような概念をもっていないとては、乳児は、環境に対して何も問うことができないし、いかなる情報も探ることができないはずだ。世界は、本質的に、識別不能になってしまうのだ。さらに、強化モデルが成り立つには、個人は、強化の種類についての概念をすでにもっていないとてはならない。すなわち、もし、人がある出来事を「成功」「失敗」として概念化できないならば、その人はその出来事から何も学習することはできない。あるいは、もし、子供が、「親の注意」と日常生活におけるただの雑音とを区別できなければ、そしてもし、子供が、「良い」「悪い」や「はい」「いいえ」という発話が意味するところの概念をあらかじめもっていないとては、環境からのフィードバックが、子供の概念レパートリーに影響を与え、それを広げるなど、ありえないだろう。

しかしながら、すぐに気づくように、まさにこれらの概念の起源こそ、強化理論が説明しようとしているのではなかったか？ 結局のところ、強化が機能するための様々な概念は、どこから生じるのだろうか？ 子供はいかにして「叱られる」「誉められる」という概念を獲得するのだろうか？ 強化理論は、こうした概念の獲得を説明することができない。なぜならば、概念がすでにして存在していないとては、強化(仮説検証)は機能しえないからだ。

「強化」概念を仮説検証のようなものとして捉えれば確かにこのような自己矛盾に陥るであろう。しかし、行動分析学では「強化」はこのようには定義されていない。だいいち、上記のような概念獲得が強化の前提となるとすると、動物の行動は強化不可能になってしまう。そんなばかげたことがあるだろうか？

以上の議論は、1つには前節に述べた「knowing how」と「knowing that」の違いを明確にすることで解消できる。

第2に、何かの判断を下すということと、何かの違いについて学習するというプロセスは異なる点に留意する必要がある。チンパンジーやニホンザルはもちろん、ハトやラット動物でも一定レベルの概念学習は可能であるが、それらは、刺激般化や刺激分化の条件づけの中で少しずつ達成されていくものである。「先に概念ありき」でもなければ「先に強化ありき」でもない。

第3に、環境世界との関わりは常に蓋然的な結果しかもたらさない点にも留意する必要がある。行動分析学のもとで検討された強化スケジュールに関する豊富な事例(Ferster &

Skinner, 1957)を見れば分かるように、強化というのは1回1回の個別試行において仮説検証するようなものでは到底ない。もっと確率的で、かつ行動と結果とのダイナミックな随伴関係のもとで形成されていくものである。

なお、Gergen(1999、翻訳書 p.141-142)はスキナーの強化の実験について次のように記している。

実験で得られた結果そのものが、ある理論を証明したり反証したりすることはありません。しかし、実験の結果は、理論の非常に強力な具体例となります。「実証的な結果」という具体例によって、理論に生命が吹き込まれ、私たちはその理論がもつ重要性や可能性を正しく理解できるようになります。つまり、人間科学の優れた研究は、報道写真やテレビニュースでの目撃証言のような機能を果たすのです。時に私たちは、それらに感銘を受けたり、魅了されたりすることもあるでしょう。

私とスキナー(B.F.Skinner)の強化理論との出会いは、まさにそのようなものでした。私は、さまざまな知的・政治的背景をもつこの理論に対して、ある種の警戒心を抱いていました。それにもかかわらず、私は、教授が小さく丸めたえさをういてハトの行動を完全にコントロールする心理学の専門用語を用いていえば、「刺激随伴性」を操作して、ハトにオペラント反応を学習させる場面を見た時、その理論のもつ魅力に否応なしにとらえられていました。実験を見て「なるほど、そうか」と納得した時のあの感覚を、私はたぶんいつまでも忘れないでしょう。

長谷川(1998)も主張しているように、1つの実験である理論が証明されるということはありません。この点で Gergen の指摘は正しいのだが、1つの実験は決して、見学者に感銘を与えたり魅了させるだけのものではない。3.3に述べた「関わりあり。ゆえに我あり」という視点から、強化によって世界がどのように構成されていくのかに目をむけるべきである。

3.7. 科学的認識のとりえ方

Skinner(1953)が著した『科学と人間行動』は、行動が科学研究の対象となりうること、実際にどのようなアプローチで研究が可能かを明らかにしたものであった。しかし、だからと言って、伝統的な自然科学の方法論をそっくり踏襲したわけではない。特に、仮説演繹ということと、仮説構成体に関しては、他の行動主義とは本質的に異なっている。科学的発見についての行動分析学の考え方は、むしろ、社会構成主義の主張に似通ったところがある。

しかしこのことに関する Gergen(1994)による行動分析学の主張の特徴付けは必ずしも正確ではない。Gergen(1994、翻訳書 p.21-22)は

ワトソンやスキナーのような急進的行動主義者は、徹底的に「科学的」たらんとし、観察可能なもののみを研究対象とし、心的状態のような仮説的領域についての陳述を回避した。...【中略】... 実際、急進的行動主義者は、いかなる心的過程も特定しないけれども、人間行動を、合理的で問題解決的なものとして記述する。かくして、仮説演繹法の第二段階は、暗黙のうちに理論に組み込まれているのである。... 急進的行動主義は、徐々に、新行動主義の理論(S-O-R 理論)に道を譲っていった。なぜならば、初期の論理実証主義の教義、すなわち、理論言語と現実世界の観

察との正確な対応を最重視する教義には、あまりにも制約が大きいことがわかったからだ。

心理学は、「仮説的構成体」の概念を手に入れることができた。仮説的構成体とは、刺激と反応を媒介する仮説的な心的状態を指す概念である。こうして「心」について語る道が開かれ、行動主義者は、論理実証主義のメタ理論の中心である観察と論理のプロセスに機能的に対応する用語を用いることができるようになった。

として、行動主義の発展において仮説演繹法と仮説構成体が重要な役割を果たしていると主張している。このほか、前節の**3.6.強化についての誤解**ですでに引用した箇所にも Gergen (1994.、翻訳書 p.23)「**仮説演繹システム全体が、行動主義の様々な学習理論の中に現れている**」という記述がある。

しかし、実際には、Gergen (1994.、翻訳書 p.23) が “ 以上の議論の結論として、クラーク・ハルの『行動の原理』からの引用に優るものはないだろう ” として言及しているハルの理論は、現在では歴史的遺物以外の何物でもない。また、ハルの仮説演繹法と仮説構成体に基づくアプローチ方法を最も手厳しく批判したのは、スキナーの「Are theories of learning necessary?」という論文であった (Skinner, 1950)。

さらに、佐藤(1993)は「行動分析学における動物実験の役割 <理論>の敗退と反復実験の勝利」という評論において、仮説演繹法や仮説検証を目的とした実験が敗退し、行動分析学が重視する生起条件探求型実験が勝利に終わった理由を詳細に解説している。

長谷川(1998)は、佐藤(1976)の翻案として 行動分析学における科学的認識の特徴が *科学的認識は、広義の言語行動の形をとるものだ。人間は、普遍的な真理をそっくりそのまま認識するのではなくて、自己と他者の相互の要請に応じて、環境により有効な働きかけを行うために秩序づけていくというのが、基本的な視点となっている。*

という点にあることを指摘した。

社会構成主義では知識は社会的に構成されるという主張されてきたが、以上見てきたように、じつは行動分析学の捉え方もきわめて似通っているのである。もし違いがあるとすればそれは、行動分析学においては「知識が社会的に構成される」プロセスは行動随伴性に依拠していると考えている点、また随伴性のかなりの部分は操作可能であり、再現可能であると考えている点であろう。

4. 対話から発展へ

以上見てきたように、行動分析学は、社会構成主義の立場からは十分に理解されておらず、他の行動主義とひっくるめて批判もしくは無視されてきたように思われる。しかし、誤解を解消することにより、かなりの共通点を見いだすことができる。これらをふまえて、最後に、行動分析学や社会構成主義的視点に立つ心理学研究がめざすべき道すじについてまとめておくことにしたい。なお、紙数の都合で、さらに進んだ議論は本稿の続編以降で述べる予定である。

4.1. 心理学研究のアカウントビリティ

下山(2005)は、心理学を「19世紀の終わりに西欧社会で成立し、近代化とともに20世紀に発展した学問」と位置づけ、「時代状況が大きく変化しつつあるのにもかかわらず、19世紀末に科学をモデルに成立したという過去にこだわって自らを規定していることは、どのような意味があるのだろうか。」と疑問を呈した上で、

科学的であることが単純に権威でなくなりつつある現代においては、学問は新たな存在意義を見出し、それを社会にアピールしていかなければ、生き残れなくなりつつある。まさに、個々の学問のアカウンタビリティが問われている状況になっている。

【中略】

心理学の目標を普遍的法則の定立とした場合、心理学の活動は科学的研究ということになる。ところが、アカウンタビリティを重視するならば、社会的問題の解決に貢献することが、心理学の目標となる。そこでは、心理学は科学的研究活動ではなく、専門的実践活動として位置づけられることになる。ここにおいて、心理学とは科学的研究活動なのか、それとも専門的実践活動なのかという、心理学の目標に関しての基本的な相違が生じてくる。

という形で、アカウンタビリティという考え方に基づく変革の必要を説いている(p.11-14)。

この指摘は、行動分析学や社会構成主義に限らず、すべての心理学研究において、研究のアカウンタビリティに留意する必要を説いている。

このような心理学の危機は、狭い領域に閉じこもってモデルの改訂にあけくれ、そのことだけに関わる論文を積み重ねることが自己の研究業績であると考えている心理学者たちには意識されない。そして、おそらく、そういう心理学者たちは、大学では、相も変わらず「心理学とは心の科学である」、「基礎研究は大切だ」などと語りながら、使い古しの教科書を使って実験研究の事例紹介を主体とした授業を行うことになる。

もちろんそれでも大学教員としての地位は保障されるし、大過なく定年を迎えられるとは思っている。しかし、昨今の大学改革にあっては、そんなことでは心理学分野の充実の必要を説明できるわけがない。やはりアカウンタビリティは必要である。

なお、下山(2005)は、上記の心理学の危機が心理学教育の現場に混乱を与えることについて、以下のような危惧を表明している。行動分析学においても社会構成主義に基づく研究においても、心理学が何を目標とするのかについて明確な道筋を示す必要がある(p.18)。

上述の矛盾や混乱によって最も直接的な影響を受けるのが、心理学の教育である。心理学の在り方において矛盾や混乱が生じているならば、心理学を教える際の目標や方法が定まらないことになる。心理学が何を目標とするのか、その際にどのような方法を採用するのかについてのコンセンサスがなければ、心理学教育の内容は混乱したものとなる。そして、教育内容が混乱していれば、当然のことながら、その混乱は心理学を学ぶ学生たちに影響を与えることになる。そして、それらの学生たちは、混乱を抱えたまま心理学を専攻することになり、心理学の混乱はますます拡大していくことになる。

4.2. 基礎と応用の垣根を超える

前節で言及された「普遍的法則の定立を目標とした科学的研究」か「社会的問題の解決に貢献する専門的実践活動」に関して、杉万(2005)は、以下のような主張を展開している

(要約は長谷川による)

研究者は何らかのローカリティ(特定の時空間)に身を置いている。決して、ユニバーサリティの中(時空を超えた位置)にいたのではない。人間科学の知識は、基本的に、限定された時期と場所における限定された人々による共同実践、つまり、ローカリティの中から生まれる。

自然科学は、普遍的事実を探求する科学である。普遍的事実を探求するには、事実についての知識が普遍的に正しいことを、実験や観察によって実証しなければならない。したがって、自然科学の目的は、普遍的事実の「実証」だと言える。それに対して、人間科学の目的は「実践」、共同的な実践である。

人間科学におけるデータ収集や観察は、あくまでも共同実践のためのものである。それに対して、自然科学におけるデータ収集や観察は、普遍的事実を実証するためのものである。自然科学のデータや観察結果は、場所を超え、時代を超えて妥当する事実(現象)の「標本(サンプル)」である。

人間科学の知識は、その知識の前提となっている目的や価値を共有する人々の実践にとってこそ、意味ある知識である

人間科学は、普遍的事実を追求する科学ではない。人間科学は、ローカルな共同実践のための科学である。

ちなみに行動分析学においては、「実験的行動分析」と「応用行動分析」という分類はあるものの、実験で見出された原理を現場で確認するというように両者の交流は活発であり、同じ研究者の手で関連づけられることも少なくない。この点では、行動分析学のアプローチはローカリティに身を置いた研究と言うこともできる。また行動分析学で論じられる原理や法則は、必ずしも普遍的真理の探求をめざすものではない。3.7.に述べたように、行動分析学では、むしろ、生起条件探索型の研究が主流となっている。

なお、杉万(2005)は、「人間科学においても、定量的な観察言語をもっと活用すべきである。しかし、その場合、従来の心理学で行われてきたデータ解析を批判的に見直しておく必要がある。かりに論理実証主義のメタ理論に立つとしても、常軌を逸しているとしたか思えない現状がある。」として、心理学におけるデータ解析に関して具体的内容に即して種々の批判を展開しているが、本稿の趣旨から外れるのでここでは言及しない。

4.3. おわりに

本稿では主として、Gergen(1994, 1999)および杉万(2005)の著作に基づいて社会構成主義と行動分析学との対話の可能性を論じたが、社会構成主義については多種多様な立場があり、ここで述べた内容がすべてに当てはまるものではない点をまずお断りしておく。

Gergen(1994)の著作に関して、訳者の一人、永田素彦氏は「訳者あとがき」の中で、この著作には3つの意味で偏りがあることからくる物足りなさであると記している。その偏りとは、

本書は認識論的研究に偏っている。...【中略】... 実践が重要であるという社会構成主義の主張を徹底するならば、研究者、実践家、当事者による共同実践がより重視されるべきだろう。

本書は、discipline-oriented な研究に偏っている。...【中略】... 共同実践を重視するならば、人々が日常的に直面している社会問題を扱う issue oriented な研究も一層重要であるはずだ。

本書で言及されている研究のほぼすべてが、質的研究で占められている点である。実際、本書に限らず、社会構成主義的研究イコール質的研究という認識は、現在、きわめて広く共有されているように見受けられる。...【中略】... しかし、数学的言語を用いた研究も必要不可欠である。

の3点である。社会構成主義との対話を求めるには、これらの「物足りない」点にも目を向ける必要がある。なお、永田氏が触れておられるように、Gergen は 1991 年に、社会構成主義に賛同する研究者や実践家とともに、THE TAOS INSTITUTE*1 という NPO を旗揚げし、そこでも主導的役割を果たしている。この NPO の活動内容を詳細に把握しながら行動分析学との対話を開くことも今後の課題である。

次に、言語による現実構成を重視している社会構成主義ではあるが、言説の成立過程におけるスキナーの言語行動の理論をもっと取り入れる余地がある。例えば Gergen(1994) は、オースティンが 1962 年に提唱した「事実確認文と行為遂行文の区別」を引用しているが、スキナーが言うところの、マンド、タクト、イントラバーバル... といった概念ではもっと有効な説明ができないものか、原典に立ち返って比較検討する必要がある*2。

もう1つ、本稿では取り上げる余裕が無かったが、杉万(2005)は、人間科学の現場において、「一次モード」と「二次モード」の繰り返しの重要性を強調している。行動分析学は「一次モード」において、行動の予測や制御に真価を発揮する学問であるとも言える。これにリンクする二次モードはどうあるべきか、という点も今後の検討課題である。

引用文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. New York: Oxford University Press.
- Berger, P. & Luckmann, T. L. (1966). *The social construction of reality*. New York: Doubleday/Anchor.
- Ferster, C. B., & Skinner, B. F. (1957). *Schedules of reinforcement*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Gergen, K. J. (1985). The social constructionist movement in modern psychology. *American Psychologist*, 40, 266–275.
- Gergen, K. J. (1994). *Realities and relationships; Soundings in social construction*. Cambridge: Harvard University Press. [永田素彦・深尾 誠 訳 (2004) : 社会構成主義の理論と実践----関係性が現実をつくる, ナカニシヤ出版.]
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to Social Construction*. London: Sage. [ガーゲン(著)東村知子(訳) (2004) : あなたへの社会構成主義, ナカニシヤ出版.]

*1 <http://www.taosinstitute.net/>

*2 こうした検討は Guerin (1992)によってある程度行われている。

- Guerin, B. (1992). Behavior Analysis and the Social Construction of Knowledge. *American Psychologist*, 47, 1423-1432.
- 長谷川芳典 (1993). スキナー以後の行動分析学:(3)S-R 条件づけ理論との混同. *岡山大学文部部紀要*, 20, 65-73.
- 長谷川芳典 (1998). 心理学研究における実験的方法の意義と限界 (1). *岡山大学文部部紀要*, 29, 61-72.
- 長谷川芳典 (2004). スキナー以後の行動分析学(14)随伴性概念の再評価. *岡山大学文学部紀要*, 42, 13-33.
- Hull, C. L. (1920). Quantitative aspects of the evolution of concepts: An experimental study. *Psychological Monographs*, 28, 123-125.
- Hull, C. L. (1943). *Principles of behavior*. New York: Appleton-Century Crofts.
- Kuhn, T.S. (1962). *The structure of scientific revolutions*. Chicago: The University of Chicago Press. [中山茂(訳). (1971). *科学革命の構造*. みすず書房.]
- Moscovici, S. (1988). Notes towards a description of social representations. *European Journal of Social Psychology*, 18, 211-250.
- 中河伸俊 (2001). Is Constructionism Here to Stay? ----まえがきにかえて----[中河伸俊・北澤毅・土井隆義(編). *社会構築主義のスペクトラム～パースペクティブの現在と可能性～*, pp.3-24. ナカニシヤ出版]
- Ryle, G. (1949). *The concept of mind*. London: Hutchinson.
- 佐藤方哉 (1976). *行動理論への招待*. 大修館書店.
- 佐藤方哉 (1985). 行動心理学は徹底的行動主義に徹底している. *理想*, 625, 124-135.
- 佐藤方哉(1993). 行動分析学における動物実験の役割----<理論>の敗退と反復実験の勝利----. *心理学評論*, 209-225.
- 下山晴彦 (2005). 心理学論を考えるにあたって----科学であることをめぐって [下山晴彦(編) *心理学の新しいかたち 第1巻 心理学論の新しいかたち*. 誠信書房. pp.3-26]
- Skinner, B. F. (1950). Are theories of learning necessary? *The Psychological Review*, 57, 193-216.
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York: Macmillan. [河合伊六・長谷川芳典・高山巖・藤田継道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香(訳)(2003). *科学と人間行動*. 二瓶社.]
- Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Skinner, B. F. (1974). *About Behaviorism*. New York: Knoff.
- 杉万俊夫(2005). 社会構成主義と心理学. [下山晴彦(編) *心理学の新しいかたち 第1巻 心理学論の新しいかたち*. 誠信書房. pp.66-84]
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・マロット・マロット(1998). *行動分析学入門*. 産業図書.
- やまだ ようこ (2004). 質的研究の核心とは. [無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ(編) *質的心理学 創造的に活用するコツ*. pp.8-13. 新曜社.]